

令和3年5月31日（月） 第4回富山県成長戦略会議 議事要旨

<開催概要>

- 1 開催日時 令和3年5月31日（月）14：00～16：00
- 2 開催場所 富山県庁4階大会議室、オンライン
- 3 出席者（五十音順）

安宅 和人	慶應義塾大学環境情報学部教授、ヤフー株式会社 CSO
齋藤 滋	富山大学学長
高木 新平	株式会社ニューピース代表取締役社長
土肥 恵里奈	株式会社ママスキー代表
中尾 哲雄	富山経済同友会特別顧問
中村 利江	株式会社日本 M&A センター専務 CCO、 株式会社出前館エグゼクティブアドバイザー
藤井 宏一郎	マカイラ株式会社代表取締役 CEO
藤野 英人	レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役会長兼社長
前田 大介	前田薬品工業株式会社代表取締役社長
藻谷 浩介	株式会社日本総合研究所主席研究員
吉田 守一	日本政策投資銀行富山事務所所長

<ゲストスピーカー>

- | | |
|-------|-------------|
| 山崎 満広 | 合同会社山崎満広 代表 |
|-------|-------------|

<議事次第>

- 1 開会
- 2 議事
 - ① 基調報告
 - ② 意見交換
- 3 閉会

1 開会（知事挨拶）

早いもので今回で4回目の会議となった。前回4月28日の3回目の会議では、デジタルとデータサイエンスのテーマで、齋藤滋委員、中村利江委員からの基調報告に基づいて議論いただいた。このテーマについては、この春、4月1日の組織改編においてデジタル化推進室を設置した。また先般、DX・働き方改革推進本部を、私を本部長として立ち上げ、民間人材からDX・働き方推進補佐官、副補佐官を任命させていただいた。特に補佐官である川西康之さんは、委員のお一人、高木新平さんとも同世代の、本当に新進気鋭の方である。今後ますます加速し、スピード感を持って進めていきたい。

今日は、「目指せポータルランド！観光・移住・子育てと広報戦略」がテーマ。安宅和人さん、山崎満広さんにご講演いただき、それを基に議論を進めたい。

そして、1つうれしいニュースがあったので皆さんと共有したい。今日のテーマの一つ、観光について、国が指定するナショナルサイクルルートについて、今まで3つのルートが指定されていたが、このたび新たに3つのルートが指定された。そのうちの一つに富山湾岸サイクリングルートが指定された。国交省から2時に発表ということなので、皆様と共有させていただいた。今後ますますこのルートに磨きをかけて、国内外から多くのサイクリスト、観光客に来ていただけるよう進めていきたい。

2-① 基調報告

【安宅委員】講演資料に基づき説明

- ・ COVID-19（新型コロナ）の背景は重い。大きな理由には、地球上の哺乳動物の96%が人間と家畜であり、人間界と自然動物界がぶつかり過ぎていることがある。だから、こうやって猿とかコウモリ等々からいろいろ感染してくる。このままこの状態が続く限り、パンデミックはもっと起きる。森林破壊と感染症の発生に関係があることは広く知られている。
- ・ 人間の活動の結果、温暖化が続き、あと二、三十年で3度ぐらい上がることが予想されている。1万2千年凍ってきた永久凍土が解けて、これまで凍結されてきた病原体のたぐいがでてくるリスクが高まっている。以上の結果、パンデミックが更に増えるということはほぼ確実なので、現在が一時的なものと捉えてアフターコロナとか言っている場合じゃないという話をしている。世界的にwithウイルスの問題をどう考えるか。パンデミック・レディ (pandemic-ready) な社会づくりを考えていくのが大変に重要だと思う。
- ・ 温暖化の結果、環境省によると、2100年になると風速90メートルの台風が予測されている。風速90メートルというのは基本的には基礎すらきれいに残らないというレベルのもので、これを予測した環境省の人に、ちょっとあおり過ぎじゃないのかと聞いたら、「これはアグレッシブシナリオではない」と。
- ・ 調べてみると、富山もかつて戦後、何度も洪水で多くの人が亡くなっていて、治水計画のおかげで何とか落ち着いているけれど、戦後級のことがどんどん起きかねない未来が待っている。これらのリスクが顕在化するのには、そんなに遠くない未来、二、三十年後の未来だと思っていたほうがいい。
- ・ 温暖化以外にも太平洋西側地区では、スマトラ島沖地震、東日本大震災に見る通り、地殻活動が活性化している。内閣府のデジタル・防災技術ワーキンググループ未来構想チームの座長としてお聞きし驚いたが、たった1秒後に起きてもおかしくないのが千島海溝沖地震だという。日本海溝が3.11ですごい勢いで動いたわけだが、その北にある千島海溝の歪みは残っていて、いつ来るか分からない。南海トラフもいつ来るか分からないし、天正の大地震で家康と秀吉の未来が変わったように、富山は地震があまりないと言われているが、油断はできない。
- ・ ディザスターの中でも一番厄介なのが火山。火山灰が降ると電線も切れやすくなる上、

そもそも首都圏では3センチぐらいで上下水道が全部止まってしまう可能性が高いと想定されている。

- ・ これらの大多数は予測できない上、たとえ予測できたとしても対応できないため、ディザスター・レディ (disaster-ready) 化も重要だ。これまでのように人間と地球を分離して考える時代は終わり、平和の定義が変わったという見解をもっている。
- ・ 今までピースフルに生きてきたと思われる富山も、前回の戦争で市街地の99.5%も破壊されて、広島、長崎以外で最大級破壊されてしまった。戦争がないとしても、やっぱりパンデミック・レディ (pandemic-ready) かつディザスター・レディ (disaster-ready) な空間をつくるというのは、未来にとっては大変に重要だと思う。
- ・ 世界中でスマートシティプロジェクトが走ってきたが、ほぼ全て失敗に終わり、単なるスマートシティは答えではないことが明らかになっている。自分はDXとかさんざんやれと言ってきた人間の一人でもあり、経団連のSociety5.0のプランを検討した五、六人の委員の一人であるが、デジタルは本質的には手段。基本的には天災や感染症に対し、スーパーレジリエントな状況こそ目指すべきで、これは富山も全く変わらないものだと思う。雪だけではない。
- ・ パンデミック・レディ (pandemic-ready) という視点でみると、開放空間のほうがよく、なおかつ疎のほうがよく、非接触のほうがよく、モノがががが動く社会がいい。ということで、そういう意味では、これまでの都市文明と同じような密閉×密が望ましい時代は変わったと考えている。開放×疎の略で、僕は「開疎」と言っている。これは、別に都市をやめると言っているわけではない。都市はやめられないので、都市空間の中で「開疎」をやらないといけないというのが1つ大きい問題で、東京だけじゃなくて富山においても同じだと思う。結局、田舎と言われている地域でも、ほとんどの人は都市的な空間に住んでいる。だから、この問題は富山であっても一緒。
- ・ 実際、今、博多の天神の周りで50ぐらいのビルを一気に建て替える「天神ビッグバン」という大きなプロジェクトが始まっている。コロナが始まってから福岡市の高島市長と、開疎にしたほうが良いという話を相当した。天神ビッグバンでは、空間を広くして、なおかつ、疎密コントロールをただけではなくて、空気をプラズマ等で殺菌するというパンデミック・レディ (pandemic-ready) なビル群に立ち代わろうとしている。これは恐らく世界最先端の都市開発の一例だと思うが、こんなに大きい街じゃないとしても、これからどうやって開疎を進めたらよいかを考えていく必要がある。

- ・ 大学病院でも新しい病院は空気の循環がとてもよくなっている。ちなみに、外は、東京みたいなどころだとCO₂は大体450ppmぐらいだが、人が多く入っているオフィスは、恐らく今知事がいらっしゃるその部屋も含め、1,000ppmは超えているのではないかとと思われる。僕は丸ビルから自分の働いている紀尾井町のビルまで調べたが、人が多くいるところで1,000ppmを割っているビル空間はほとんど見たことがないからだ。
- ・ また、土を様々な空間においてがんがん入れるというのが結構重要になる。土というのは、火星とか月にはない。これは砂と粘土と生物の死骸と膨大な微生物でできていて、これ自体が巨大な生態系であり、都市空間においても土がもうちょっと多ければパンデミックが起きにくいことはほとんど明らか。土の問題は感染症関連でほとんど議論されないが重要だ。
- ・ ディザスター・レディ (disaster-ready) について。今後迫りくるディザスターが頻発する時代のことを考えると、何が来るかということはある程度予測して、ボトルネックを取り除いておいたほうがよい。また、天災で人が埋められたりすると分単位で亡くなっていくので、安否情報をリアルタイムで把握することも大切だ。だから、リアルタイムの情報共有というのは非常に重要。
- ・ 富山はあまり災害がないのでぴんときないかもしれないが、ものすごい災害がきて、もう本当にめちゃくちゃな状態になれば行政機能は止まってしまうので、それでも落ちないように完全にデジタル化、ハイブリッド化しておくことが重要。できれば行政機能もデジタルで全部完結できるようにしておいたほうがよい。
- ・ 天災の際に何が起きるか徹底的にシミュレーションするべきで、人命対応は当然大事だが、こういう社会のOSと言うべきところをしっかりと回し続けられるように考えておくというのが、21世紀型の未来を考えるときには極めて重要。
- ・ 被災した人たちの救済のお金も大事だが、ガバナンス等もすごく大事。極限状況下においては自衛隊の助けしか実は答えがないケースが大半というのが残念な事実であって、自衛隊や消防や救命救急等との連携も含めて考えておくことが重要だ。
- ・ もう1つ重要な話は、どんなときも電気と通信が落ちないことで、これはデジタルの力を使って人命を守る前提であり超絶重大。特に疎空間でこのことは重大で、都市部はバックアップが結構強めにつくられているが、疎のところは誰もメンテしてくれないので、できる限りオフグリッド化もしくはマイクログリッド化を組んでおくことが重要。そうしないとデジタルの助けが効かなくなる。3.11がそうだった。

- ・ 疎空間には美しいところがいっぱいある。富山にもいっぱいあると思うが、疎空間の多くは数十年以内の無人化が予測されていて、基本的には廃村に向かっている。いわゆる限界集落の多くでは、人口密度でいうと0歳から15歳をあわせても1人とか2人とかになって、人を育てる限界を割り込んでしまっている。富山はこういうところはあまりないのかもしれないが。
- ・ 別に人が減っているというのではなく、人口は増えてきた。この200年ぐらいで日本も4倍に増えたとし、イギリスは5.5倍に増えて、アメリカはネイティブ（土着）の方々しかいなかったのが50倍以上に増えている。けれども、なぜこうなってしまったかというところ、当然、都市に向かっているからだ。このままでは都市にしか人が住めない未来に向かう。
- ・ 私は、都市集中型の未来しかないというのは残念過ぎるので、何かオルタナティブをつくれないかという運動論をこの三、四年やってきている。例えば藻谷さんがよく御存じの御立さんもコアメンバーの一人であり、相当に強い面々で議論している。
- ・ この図は、横軸がダイナミックな知的生産で面白いことがいっぱい起きているという軸で、縦軸は圧倒的に美しいという軸。この両方の力を持った空間をつくり上げることが必要だと思っている。
- ・ 地方都市でも、ほとんどの都市は求心力を失いつつあるというのが私の見解で、倉敷とか尾道みたいに、面白い人が都市等から流れ込んできて新しいものが生み出されているところもなくはないが、大多数のところはそうではない。理由の一つは、面積割合的には富山を筆頭に、中心地区が過度の空爆を受け、土地の記憶の多くが消された都市が多過ぎるからだ。
- ・ 一方の疎空間については「イケている開疎空間（風の谷）」を目指すべきではないか、そういう取組みをやっている。
- ・ 疎空間が回らない大きい課題としては2つある。一つはインフラコストの重さ。県レベルで見ると人口密度は関係なくて、1人当たりの予算はそれほど変わらないが、基礎自治体になるとかなりの差がある。結局人口密度の関数になっていて、低密度空間というのは疎空間になればなるほど高コストになる。1人あたりの予算が1,000万円を超えている村も幾つもある。三、四人の家で四、五千万の税金が投入されていたりするということだ。
- ・ なぜかというところ、結局、土木を含めたインフラコストがとにかく重く、土木は月2兆

円ぐらい国全体で予算があるけれども、ほとんどが社会インフラで、これらをどうやって低廉かつメンテナブルにするかというのは大きい問題だ。

- ・ 疎空間というのは人命が少ない分、都市部よりもどうしてもプライオリティーが低いので、自力で何とか立ち直るようにつくり上げないといけない。これを踏まえると、そもそも壊れにくくてレジリエントにしておく必要がある上、全てをモジュール構造にしておく必要がある。
- ・ もう一つの課題は、先ほど見たとおり求心力問題。才能と情熱が都市部に逃げ出していってしまうというのがものすごく重大な問題。私も18で富山を出てからほぼ帰らないという感じで、コロナ(COVID-19)もあって、数年間、母親の顔すら見られていない。
- ・ どうやったら求心力が生まれるか。1つは絶景、絶快と僕らは呼んでいるが、圧倒的に美しいということが大きいと思う。
- ・ 求心力まわりの大きな課題の一つはヘルスケア。年を取ったら体が壊れやすくなるのは事実だが、基本的にはピンピンコロリがよい。死ぬ前日までピンピンしているのがよくて、できれば死ぬ前日まで働いて社会で価値を生み出しているのが望ましい美しい社会であると僕は思っている。
- ・ 疎空間でそう簡単に人が死なないようにするというのは重大な問題。これはアップルウォッチで助かった人の例だが、こういうスマートデバイスがあると死ななかつたりすることもある。うまくセンシング技術を使って、その人たちをモニターしてあげるというのも必要ではないか。
- ・ 疎空間をしっかり求心力がある形をつくるためにもう一つ大事だと思っているのは教育問題。これまでの教育というのは基本的には都市型のマシンの人を生み出してきた。一方、疎空間では、都市に順応すると言うより、空間をつくり直せるような人が必要で、サバイバリスト兼カタヨリストが必要であると我々は考えている。圧倒的にチャーミングな人材を育てるのが重要だ。
- ・ また、森が結構重大で、多くの疎空間の森は多様性を失っていて価値を失いつつある。日本の森の4割以上が人工林だが、97%が針葉樹林で、その7割がスギかヒノキしか生えていない完全な単層林になっている。
- ・ 地下の水の流れもこういう単層林状態では往々にしてよくない。ディザスター・レディ(disaster-ready)化のためには水を循環するようにならなくて、この視点で見ると、日本の疎空間の多くは謎の擁壁がいっぱいあって、これをうまく水が抜

けるようにつくってあげることが重要。

- ・ 根本から土木を考え直す必要がある。軟らかい土木を発明しないといけない。これをやらないと、ディザスターから守るためにつくられたもののはずが逆に災害を悪化させるという負の循環に陥ってしまう。
- ・ 土地の魅力という視点で考えると、当然、土地の持っている独特の記憶をうまく生かす必要があつて、これがないと求心力が生まれない。食事も、どれほどおいしいたくわんだろうと、そればかりだと飽きてしまうので、我々の時代に即したおいしいすばらしい食をつくる必要があるというのも求心力上、重要だ。
- ・ 空間そのものを根底からプロデュースし直さないといけない。具体的に言うと、たとえば生活空間とオフィス空間は限りなく一致する流れであつて、今のコロナだけじゃなくて、多分この流れはずっと続くと思う。生活空間の横にオフィス空間がある。だけど、疎空間にやって来る生産性の高いクリエイティブクラスの人たちも楽しく生きていける、そういう空間をうまくつくっていくというのが1つチャレンジだと思っている。
- ・ 世界的にも非常に価値のある疎空間というのは幾つもあつて、例えばこれはイギリスの湖水地方だが、とても美しい。世界遺産だが、人口密度は18人/km²ぐらい。フランスで一番美しい村と言われている南仏にあるゴールドもそう。トスカーナのピエンツァ、これは十四、五世紀に法王が理想の都市としてつくったまちだが、コンクラーヴェが何度も行われているようなところで、ここも見渡す限り世界遺産だが、とても美しい疎空間。ここの人口密度は17人/km²ぐらい。
- ・ これらを見て分かるとおり、空間そのものが価値のある場所じゃないといけない。こういうところに変な工場とか大きなショッピングモールとかつくったらぶち壊しになってしまう。これらは実はインフラである道とか上下水道の通っているところだが、インフラそのものを美しくつくり上げなければならない。
- ・ 日本で疎空間と思われているところの大多数は、世界的な基準で言うと全然疎ではない。人口密度が高過ぎる。もっと疎にしなきゃいけない。なので、根本から思想転換する必要があつて、本当に価値のある疎空間をつくるのであれば、圧倒的に疎な空間にする必要があると考えている。
- ・ 周りの都市部とセットで考えるべきであつて、そもそも疎空間の多くは電線とか鉄塔とかいっぱい建っているが、この状態だともう美的に見苦しすぎて価値の生み出しよ

うがない。これでは圧倒的な価値空間にならない、クリエイティブクラスも来ないので、思想転換する必要がある。

- ・ 単に目先のGDPの規模で考えるのをやめなければならない。空間価値をどこまで高められるか。さっきの湖水地方だと、ちょっとした農家が、小さな牧場とセットで2億円ぐらいで普通に売っている。プロパティタックス（固定資産税）も高い。空間価値がとにかく圧倒的、そこにいるだけですばらしいので、そこにクリエイティブクラスの人が住んで、ちょっと羊でも飼いながら本とか書いていたりする。
- ・ このように、全く違うレベルの空間創造が必要で、人を集め過ぎないということも大事だし、所有者が何をしてもいいという発想を撤去しないと、この類いの空間はつくれない。
- ・ 疎空間ではヘルスケアについても医療機関単発の経営視点では駄目で、社会保障全体として考える必要がある。クリニック中心で物を考えると、結局、客を増やせ、要は患者を増やせというエコノミクスになってしまう。それでは駄目で、むしろピンピンコロリで、患者はなるべく発生しない、いつまでも社会保険料が払える状態でお元気なのが望ましい。社会保険料までセットにしたエコノミクスをちゃんと考えていかないといけない。
- ・ 先ほど見たとおり、固い土木というのがもう環境を破壊しているので、そこは軟らかい土木にして、同じ土木費を使うにしても全然違う土木が必要で、僕らはほぐす必要があると考えている。
- ・ 美観視点ではワイルドネイチャーでなく田園というところが結構重要で、先ほど見たとおり、これらの美しいところはほぼ田園。単なる森はこの世の人間は美しく感じない。森と田園の調和が重要だ。これはすごい重大な話で、多くの疎空間ではこの視点が基本的に抜けているので、美しい谷的な空間がつかれないのだと考えている。
- ・ これはとある疎空間でのエコノミクスだが、見てみると、自主財源はこれだけしかないけれど、県からの交付金とか国庫金とかばかりになってしまって、総コストの相当部分が都市からの輸血で回っている。これではいつか捨てるしかないという議論に多分なってしまう。
- ・ 21世紀の我々の子や孫の世代が捨てる。それでいいのかと。なので、このヘルスケアや土木に大量に使われているコストを空間とか文化などに持っていかないといけない。ヘルスケア、土木、教育に金をかけ過ぎていて何も生まれず人が去るというサイクルを、

そうではなくて、教育にかけてもいいけれど、価値が上がるようにかけて、そのコストを下げていって、さらに価値が上がるようにしないといけないというのが僕の基本見解で、そうすることで、圧倒的に価値ある空間にするとともに、根本から組み直すということをやらない限り、この辺の話は全部絵に描いた餅になると思っている。

- ・ そもそもディザスター・レディ (disaster-ready) な空間をつくっていくことによって、当然、空間価値も上がるしコストも下がる。低インフラコストでカーボンプライシングも間もなくお金になってくると思うので、こういった価値から所得税や固定資産税も上がって、空間価値は維持コストが下がって行って価値が上がっていくということになって、この余剰をさらにコモンズ的に回していくということが必要だと思っている。
- ・ あと、文化的に言えば、色々な面白い人が住み着く空間をつくり上げる必要があると思っている。そうすることでだんだん面白い人たちが集まってきて、思いがけない出会いがあって面白いアウトプットが生まれてくる。そこに土地特有の記憶なり特性が働いて、この空間と土地の記憶と人の出会いというのが文化を生み出す鍵になると考えている。
- ・ まちの作りについて。つくね型というのは、これはどこかの県の資料館で見えたものだが、つくねのように棒の周りにいっぱいまちがある。この方式では美しい疎空間はつくれない。なので、ブドウ型、ブドウの房みたいな形につくり上げるというのが一つのポイント。これをほぐすのが結構な手間だけれども、これはよっぽど古い町並みが残っているとき以外はほぐす必要があると思っている。
- ・ さらに、テクノロジーやデザインを使い倒すことが当然必須。先ほどの電力や通信の話もそうだし、危険な空間はどこなのかとかちゃんと分かって、ヘルスケアもそうだし、あらゆることのセンシングもそうで、教育をやるにしてもそうだし、空気や水の循環もそう。ほかにもいっぱいあると思うが、書き切れていない。
- ・ この類いの問題は、今が病気で治しましょうというタイプのギャップフィル型ではなくて、ビジョンを設定して、そこから何をキャップだと考えるかという問題設定なので、今までとは全然違う思考を回さないといけない。そういう意味で、どういう像を描いて、どういうテクノロジーをどういうふうに全体としてパッケージングしていくのかということを考える必要がある。
- ・ 私たちが何年間も詰めて考えてきたことのある種煎じ詰めた部分を少しお話しましたが、

疎空間については、こういったことをしっかり詰めていくことが必要だと思っている。
これを「風の谷という希望」ということで今取り組んでいる。

【山崎委員】講演資料に基づき説明

- ・ これからの都市について、ポートランドをベースに考えたらどういう都市がいいかということで、自分なりに過去10年ぐらいの研究で出した結果だが、これからは本当に地方都市の時代が来るだろうという部分と、成長ではなくて持続可能とするための政策が必要、取組が必要、デザインが必要になってくると。
- ・ 計画ではなくて、もう実験の時代なので、いろんなことを試さなきゃいけない。正解がない。場所によって違うし、風土、環境などによって変えていかないといけない。カスタマイズが必要になる。なので実験になると。
- ・ ヒエラルキーではなくネットワーク、横のつながりを大事にしないといけない。日本は特にエリート主義でヒエラルキーが強いので、横のつながりをどうやってつくっていくかというのを個人レベルから大きな組織、国レベルで考えないといけない。
- ・ 管理ではなくてエンパワーメントが必要だということで、これは女性の活躍についてもそうだが、どちらかというと、小さい頃から勉強できない人が活躍できないのが日本の常であって、そうじゃないようにしないといけない。秘密を保持するのではなくて透明性を生かして、情報ツール化によって富が増えるような取組を増やさないといけないのではないかな。
- ・ 地球に生かされているという人間の種の考え方と、お互い同じものに生かされているのであるから公正であるべきだという価値観と、あとは、都市または集団として住むに当たって、個の自己実現とまちの寛容性、この地球に対する使命感、自然保全の使命感と、まちがどういうふうに使命を全うできるような住み心地をつくれるか、そういった価値を融合していく必要があると思う。
- ・ ポートランドについて簡単に説明すると、シアトルとサンフランシスコの間であって、大きな州の中でもかなり端っこにあり、ワシントンD.C.からもすごく遠い。地図で見るとわかるが、ポートランドと呼ばれる地域は本当に少ない平地であって、州のほとんどが高原砂漠、山脈地帯と海岸でできている。
- ・ さきほどの安宅さんの話によると、過疎化した地域とは言わないが、開疎的な地域というのはたくさんあるし、それがやたら近い。アクセスがいいということ。それがレジャー的な自然への取組と食の取組につながっていて、アメリカ有数のグルメ都市にもなっている。
- ・ あとは、環境に優しい部分とスポーツが有名。スポーツ産業がすごく発達していて、

例えばナイキだとか、アディダスのアメリカ本社だとか、キーンだとか、アンダーアーマーの本社なんかもポートランドにある。それは何を意味しているかという、やっぱりクリエイティブな人々が集まっているということの意味する。

- ・ 都市があって緩やかな田舎っぽいところがあってうまくつながっているということと、やはり自然環境にどこでも触れられるような空間になっている。ただ、COVID-19（新型コロナウイルス）でダウンタウンはすごく避ける場所となってしまっていて、暴動なんかもあったので、郊外に住んでいる人たちのほうが豊かな生活をしばらくはしていた。今でもそんな感じになっている。
- ・ どうしてそんなに自然が生まれているかという、都市は都市で密度を上げてきたが、都市の成長境界線というのを州政府が設けていて、これはこの赤枠の中にポートランドプラス24都市、3カウンティ入っている。これが1つの共同体として動くことによって、公共交通だとか広域の連携をうまく調整してきている。これが1つのみそで、富山県としてもこのようなことができる可能性はある。
- ・ あとは、都市の密度を上げた上でも中に自然がたくさんあって、車が少ない。密度を下げているような要素もたくさんある。また、まちの記憶を残すために古い建物を絶対に保存するということがあって、50年以上の建物は国のルールで保存しないといけない。なおかつ、ポートランド市内ではそれをわざわざ奨励するような景観設計、景観のルールがある。
- ・ 自然を取り込むために水の要素をたくさん取り入れた公園があるので、家族で集まって遊べる、子育てのために使えるような潤沢な施設が整っている。
- ・ 例えばポートランドで子育てをしていると、お父さんたちが仕事を休んで子供を連れて遊ぶ場所がたくさんあって、昼間、夕方からお酒を飲むためにバーに行くと、追いかけてこをしたり、積み木をやったり、子供が遊べるような空間があって、大人同士がお酒を飲みながら子供を見て世間話をしているみたいな、そんなこともしている。
- ・ あとは大自然が近いというのがすごく重要で、これがポートランドのダウンタウンから1時間弱のところで見える景色。富山にもたくさんこういったところはあると思うが、これが重要で、やはり大都市と田舎の連携というのがすごく重要になってくる。
- ・ 車で40分行くと、アメリカ有数のワイナリーの地域もある。オレゴンはピノノワールで有名なワイナリーがたくさんあるが、三百数十あって、このおかげで農業に従事する若者もたくさん増えている。

- ・ ポートランドの特徴として、まずライフスタイルのこだわりが強い。これはさっきの風の谷の話もあるが、やっぱりおしゃれで楽しい空間、おいしい空間というのをどんどん増やしていかないといけない、都市の魅力を上げないといけない。これが都心だけにあるのではなくて、郊外の都市にもこういった拠点が幾つもあることが重要になる。
- ・ それから、20分圏内、自分のネイバーフッドで過ごす、自分の生活圏内でいろんなものが便利で格好いいというのが重要になってくるので、それを取り巻くための環境だとか、それをつくるための生活方式、ライフスタイルをどうやって築いていくかというのも重要になる。
- ・ 地元でつくっているものを有名じゃなくても応援する。地元愛が強くて、とにかく周りでチャレンジしている人たちの応援をしようという気概がある。そうすると、やっぱりチャレンジしたい若者が増えてくる。
- ・ 自然に生かされている、地球に生かされているということで、どういった天候でも、台風とかハリケーンとかでない限りはそれを思い切り楽しむということで、冬は冬のスポーツ、夏は夏のスポーツだけではなくて、雨のときでも、何かあったときでもそれを楽しもうとする気負いがある。
- ・ あとは、使命感を持つということ。自然保全のための使命感ということで、地球に優しいことをわざわざやる。それから、面倒くさくてもやっていこうというのがポートランドの文化のノリでもある。これは1970年代、初めてアメリカでガラス瓶のリサイクルをオレゴン州が州法として設立した頃からずっと続いている。
- ・ それから寛容で、とにかくよいものは認めようという気負いがある。これはいろんな意味でだが、やっぱり自己実現しやすいまちというのは、外から来た人でも、昔からいる人でも、いいことをやっていけば褒められる、頑張っていれば助けてもらえる、そういったつながりを埋めるようなまちになっている。
- ・ これは安宅さんのスライドにも出たが、まずは大きなビジョンを掲げて、それに向かっていろんなことを試すということが重要になってくる。ポートランドも、2018年の段階で2035年に向けた総合政策を持っているし、それに向けての都市開発のビジョンとデザイン、デザインフレームワークとそれに向かってのいろんな施策をシミュレーションを立ててやっている。そのアイデアを生かすために、地域の人たちと一緒にアイデアをつくるということをずっとやってきている。

- ・ ポートランドのまちでは、We Build Green Cities、緑のまちを一緒につくろうというスローガンを掲げて、色々な方々が参加するのだが、その一つのコンセプトとして、ポートランドの都市のデザインはエコ×エコで行こうと。
- ・ にぎわい、エコノミーと自然保護のエコロジーとを掛け合わせる。これはふだんの考えだと、どうしても背を向けている2つの要素になる。自然を守るために生産量を上げる、そして効率を上げるために自然をおぎなりにしてしまうということが過去何十年もあったのだが、それを逆に掛け合わせていいまちをつくっていかうじゃないかということをして1990年ぐらいからやっている。それを、コミュニティーの意見を取り入れて、生活者目線で官民連携で成し遂げるといような取組を続けている。
- ・ そのためのマントラ、地区ごとにマスタープランをつくって、いろんな要素、例えばエネルギーだとか、自然空間だとか、駐車場だとか、交通だとか、そういったものを地区ごとに分散型でつくっていかうじゃないかということをしてまちでやっている。これが6か所ぐらいの拠点に分かれて今できているが、これがだんだん広がってくると、地区ごとのガバナンスもしっかりしてくる。
- ・ ガバナンスをつくるためにはやはり市民の参画が必要なので、地区でこういった計画を上げるためには、アーバンデザイナーと建築家が集まって、地域の人たちとああでもない、こうでもないと言いながら、デッサンを描いて、絵や言葉で未来のシミュレーションを自分たちで考えてオーナーシップを持ってもらって、地域のいいアイデアをなるべくデザインに落とし込んでいって地区計画を進める、そういったことを続けている。
- ・ 何が一番重要なのか、ポートランドの特徴なのかというと、ポートランドは時間とお金をやたらと見えない部分にかけている。最終的には見えるものに具現化するのだが、都市の政策だとかマスタープランをつくるのに対して、それが全部見えないところから十分に時間をかけているということが特徴になる。
- ・ それをうまくアーバンデザイナーとコミュニティーデザイナーたちが翻訳をして、地図上に落としたり、建物の形にしたり、まちの空間にしたりということをしてきて、過去50年の間に全然いけていない田舎町からちょっと都会っぽい田舎町に変わってきて、全米で一番住みたいまちに何度も選ばれるようになった。
- ・ 観光の分野で1つ、こういった政策はどうかと思ったのは、まず日本の観光ってどこもどっちつかずで、どこにも山があったり、海があったり、水があったり、川があっ

たりで、どこもすてきな建物があってという感じだけれど、ポートランドの場合は、もう思いきり振り切って、ターゲットを絞って、いかした頭のいいやつに来てもらいたいまち風にやっつけてしまっている。

- ・ これは日本向けにつくったビデオだが、地元のインディーズバンドが日本語で歌を歌いながら、アニメに合わせてポートランドの宣伝をしている。
- ・ まとめると、まちとしてとがってもいいのではないか、空間として迫ってもいいのではないかという部分と、あとは、まちがリーダーシップを取れるという部分もあると思う。寛容性だとか、コミュニティー的な取組だとか、あとはサステナビリティをつくっていく。そういったことが富山でもできるんじゃないかと思っている。
- ・ 最近南砺市の井波あたりといろいろ協業をしているが、ああいったちょっと変わった田舎が増えていって多くの方々が富山に移住できるようになると、多くの方が来なくてもいいかもしれないが、そういった自己実現がしやすい田舎が増えていくと面白いのではないかと思う。

2-② 意見交換

【藻谷委員】

- ・ 日本に価値ある「開疎空間」をつくるという話。そして、どこもかしこもあまりにも疎になっているアメリカで、アメリカ的なサイズで言うと密な空間を作ろうとするポートランドの話。両者は一見矛盾しているようにも聞こえるが、極端に疎なアメリカと、極端に密な日本の間に最適解があるという話だと思う。その点で富山は有望だ。お聞きいただいていた富山の方、あるいは外の方でも最近の富山をご存じであれば、富山にもそこそこ、そのような最適解のモデルが登場し始めていると、お気づきになっていると思う。
- ・ 美しい農村というと、日本人はヨーロッパを選ぶが、ヨーロッパの人たちからすれば、五箇山を選ぶ人がいても決しておかしくない。あるいは砺波の散居村に、電線がなかったら、ここが世界最高に農村だという人も既にいておかしくない。岩瀬がいいという人もいると僕は思う。そういうものが実は富山県で始まっているけれど、県民の多分99%がその真価には気付いていない。外からの眼を持っていないためだ。
- ・ お二人の今日の発表に共通していたのは、99%の県民にそのよさを分からせる前にすべきことだと思う。県民の99%が分かっていなくても、富山のいいところが分かる世界中の人にきちんとつながる伝え方、訴え方、磨き方をして、本当に面白い人を富山に集める、もしくは交流し関係人口になっていただくという戦略について話しておられた。本当にとんがった面白い人に、密な町は壊れているけど開疎の方向に行くことはできる富山をアピールし、富山を評価する外の間人を増やし、それをテコに、富山県民の自己評価も高めていくということが、できるのではないかとということだ。
- ・ ここ5年ぐらいの間に日本もようやくかなり変わってきた。5年前はまだ駄目だったが、最近ようやく、世界の人を連れてきたら「日本の田舎ってすごい」とひれ伏すようなものが始まっているような気がする。例えば新潟県で3年に1回開催される、妻有トリエンナーレ。今年の予定は来年に延期されたが、来年開催できたら、トスカーナがいい、フランスがいいと言っている人でも、いや、素材的には妻有のほうがすごいなって気付く人がもっと増えるだろう。富山もそういう方向に行くのではないかと。

【藤井委員】

- ・ 安宅さんに教えていただきたい。開疎な空間というのは、ある意味都市とセット、つ

まり、都市の密なエネルギーの高い空間は消えなくて、それとペアで開疎な空間がある、と私は理解したが、富山を開疎とした場合に、都市をどこに置くのか意見を伺いたい。

- ・ 富山は、東京に対するアンチテーゼとしての開疎を目指すのか。要するに、都市である東京と、開疎である富山を行き来するみたいな感じなのか、それとも富山市自身がポートランド市みたいに、富山県という開疎の中の中心都市になるのか。その場合、富山市は都市で、それ以外は全部開疎でいいとなると、高岡その他の市町村はそれで納得するのか。多分、どこを疎にしてどこを都市にするのかという議論が県内、国内で出てくる。もしトスカーナみたいに人口密度が km^2 当たり20人を目指すなら、富山全体で面積が4,000 km^2 だから、富山県全体の人口を10万人以下に圧縮しないと富山全体は開疎空間にならない。なので、富山県において都市というのはどこにどう設定すればいいのかを教えていただきたい。
- ・ これまでこの会議では、「富山県にもポートランドみたいな格好いい都市ができればいい」という発想で話していたが、そうではなく、富山県全体が開疎な風の谷でいいということか。

【安宅委員】

- ・ 僕はあまり都市に関心がないのだが、疎空間なのかどうなのかという視点でみれば富山市も高岡市も家や建物が集まっている部分は全部都市。僕は水橋出身の人間だが、水橋のまち中も都市の一種で十分に密。富山県に限ったことではないが、人はほとんどそういうところにしか住んでいない。都市空間は本質的に密なので、とにかくもっと疎にしていったほうがいいと思う。なので富山県の中には富山市内も含めてもちろん開疎な空間は沢山あるが、人が多く住んでいるところは開疎ではないという認識が必要。
- ・ 昔は家の強度がなかったので、寄せておいたら強くなるということがあったと思う。僕の実家は旧北陸道沿いで、多分千年前から人が通っていた道ですが、ほぼ隙間なく家が建っている。以前、隣の家を買って潰したところ、「あなたのところで家をひとつ潰したから風が抜けて困る」と向かいのおばちゃんにぼやかれるという、そのぐらい密であることが前提でまちができています。
- ・ だから、今はどこもほぼ都市に人が住んでいるというのが実態。疎密に基づく僕の定

義で言えば、都市と言うべきところに、富山県でも住民の80%以上が住んでいると思う。市内だろうが、市外だろうが、人口密度1,000人/㎥を超すところにほぼ全ての人が住んでいるはずで、滑川とかでもそうだと思うし、魚津とか、かなり開疎に普通は思われているであろう泊とかでも僕の育ったまちと同様にそうだと思う。

- ・ 基本的には効率性の観点からか集中して住むということが世界のあらゆるところで繰り返し行われている。昔は利便性上、仕方がなかったが、今は建物の強度もある上、移動も割と自由自在なわけだから、もっと開疎化を図っていったほうがよいと思う。ただ、大きいまちなかに関して言えば、密を疎にするのは難し過ぎて、あまりにも時間がかかる。こういう立地を開疎にしようと思えば、孫の世代まで50年ぐらいかけてしていくというプランを立てざるを得ないのではないかと思う。
- ・ はじめから疎の状態をベースに圧倒的に美しい開疎空間をつくるほうが恐らく負担は軽い。人が多く住んでいるまちを疎にしていくことの苦痛は半端ない。50年以上住んでいる自分の実家で、隣の家が出ていくから買ってくれと言われて、買って潰したら文句を言われる。地元民でそうだから、多分どこでもそうだと。だから、美しい疎空間をさっさと作って、まちなかはゆっくり間引く。
- ・ さっき藻谷さんがおっしゃったように、潜在的な魅力がある空間は幾つもあると僕も思う。電線と高圧線さえ消え去れば結構美しくなるところが多いのではないか。高圧線は導電効率のせいで実は下ろせない。でも、通常の電線は下ろしても大した問題はない。これは法律を改正すればいいだけで、下ろしてしまったほうが、風速70メートル以上の台風にも耐えやすくなるし、直すのもめっちゃくちゃ楽。側溝か何かに打ち込んでおけばいいだけなので、ものすごい簡単。触ったら駄目というルールを敷いておけばいいだけの話。そこらじゅうにセンサーを立てておいて、触れないようにしてしまえばいいだけではないかと思う。
- ・ なので、美しい開疎空間をつくることの候補地を選ぶことを最優先にして、密度の高過ぎる多くの安宅定義的な都市的空間は50年かけて間引くことにしよう。都市だけでも、間がある空間にしていく。答えになっているのかよく分からないけれど、多分現実的にはそういうアプローチになるかと。

【藤井委員】

- ・ そうすると、安宅さんとしては、ポートランドみたいな都市は密なのでしょうか。ト

スカーナみたいに、20人/km²とか、ああいうところが理想であると。

【安宅委員】

- ・ ポートランドは完全に都市だと思う。恐らく真ん中あたりの人口密度は数千人/km²だと思う。ポートランドがあのようにやられているのは、周りにすばらしく美しい疎空間があるから。谷的な空間が周りに幾つもあるからポートランドが成り立っているのではないかと。周りがすばらし過ぎるから息が詰まらない。だから、セットだと。
- ・ とはいうもののポートランド自体は、人口密度は高いけれど、恐らく日本の都市、富山市の市街地や東京などと比べると、はるかに緑と土が多いはず。
- ・ 僕も随分海外のまちを見てきたけれど、結局、日本の都市よりは疎で、密度が高くても上手に疎につくってある。トスカーナやフランスのプロヴァンスの中のまちとかもそうだ。アメリカのボストンとかはぱつぱつだけど、米国の場合、ああいう超古い300年以上のまちを除けば結構疎につくられている。その周りを真に開疎で土地の記憶に根ざす空間が美しく広がっているというのが良いのではないかと思う。

【藻谷委員】

- ・ デジタル化してバックアップするということだが、たとえば太陽黒点変動などによる磁気嵐で、デジタル情報が全部消えるとか、そういうのに対するリスクヘッジはできるのか。磁気記録が消えるディザスターもあるとすると、逆に紙などのデジタルじゃないものにアーカイブしておかないといけない。そうであれば、そういうかさばるものを補完する余裕のある地方の優位性もあるかもしれない。

【安宅委員】

- ・ 防災的な立ち位置でお答えすると、まず、それは、いわゆるEMP (electromagnetic pulse) で、マトリックスのセンチネルをたたき潰すEMPと同じ現象が起きるという話だと思うのだが、太陽の巨大フレア、あれは気づいたときには数分後にやってくるので、落ちていたコンピュータ以外は、地球上のコンピュータが全滅する。あれは実は最悪のシナリオ。
- ・ ただ、EMPとか巨大フレアのリスクは、地震、火山、津波等に比べたら、あまり考えなくてよい。デジタル防災未来構想チームで提案したことは意思決定機構すら停止しか

ねない巨大災害時に、デジタル空間の中だけでバラバラに避難しながらも、行政が周り、意思決定できるハイブリッド的なシステムが必要だということです。

- ・ 巨大噴火は国内だけでも数十年以内に間違いなくどこかで起きるし、地震は巨大地震が10年前に来たばかりだけれど、また来ると思う。南海トラフの三連動が50年以内に起きる可能性は、10%以上は存在する。どれかが来る可能性はほぼ100%。南海トラフの三連動が起きたときには、かなりの高確率で富士山は300年以來の噴火をする。これもほぼ確実。首都直下地震でも富士山が噴火するかもしれないので、これにまず耐え得るようにするのが大事。
- ・ EMPは悪夢だが、その次に悪夢なのは間違いなく火山。火山灰が厄介。火砕サージという火砕流の前のやつは時速100から130キロで、温度が800度から1,300度で周りにあるものを全部燃やし尽くす。ビルの上にも焼け死ぬ。その火砕サージの後の火砕流は時速70キロを超えるとんでもないもので、これまた800度以上なので、周りのものは焼け消える。その後、本当の大物登場で巨大な溶岩流が来ると。弥陀ヶ原自体が溶岩台地だけれど、途方もない、悪夢だと。そのような状況下で行政や意思決定システムが動き続けることが大切です。

【藻谷委員】

- ・ コンゴのゴマで市街地の何割かが溶岩に覆われたが、日本でもそれが起きる可能性があると理解した。地震学者で京大の元総長の尾池先生によると、2038年に南海トラフが起きる確率は7割ぐらいでほぼ確定で、かつ、そのとき富士山も噴火する確率は相当高い。だがそれは太平洋岸の話なので、富山はそのときは大丈夫ではないか。

【安宅委員】

- ・ ただ、富山も活火山に周り中覆われているので、あまり甘く見ないほうがいいと思う。天保のときは立山も噴火したわけで、冷静に考えると、リスクが大きいのは富士山だけじゃない。だから、冗談じゃないと。

【高木委員】

- ・ お二人の話を聞いて、大事なのは、何を残すかと何を変えるかというところがちゃんと持っているかどうかということだと思う。開疎な空間にしても、暮らしのイメージ

や景観がある。こういうビジュアルだ、こういう世界観だとか、ポートランドも一定のイメージがあると思う。

- ・ 富山は、黒部ダムとか、アルペンルートとか、五箇山とか、今の暮らしとはあまり関係のない観光地の絵しかなかなか浮かばないと思うのだが、どういうシーンというか、まさに未来に残す価値がある要素は何か、その辺をどう規定するのがいいのかという点をディスカッションしたい。そこが決まっていらないから、富山ブランドをどこにためていけばいいのかがはっきりしないのだと思っている。

【安宅委員】

- ・ 僕の見解では、五箇山とかは、こっち（疎空間・リゾート）だと。世界的にも大部分は、ほとんどこっち（リゾート）側のソリューションしかない。ごく一部こっち（風の谷）側に寄っているけれど、トスカーナもプロヴァンスも、大好きだけど、左上（リゾート）だと。
- ・ これを右側（風の谷）に持っていけるかどうか問われている。持っていかなくてもいいという考えもあるけれど、割り切りだと。リゾートだけれど、もうちょっと右（風の谷）に行ったらソリューションが生まれると、それは相当イケていることになる。
- ・ 何かよく分からないどこか奥地の、弥陀ヶ原かどこかで籠って何かやばいことを、たとえば高木さんが何かわけのわからない面白いブレストをして、その中に友達を送り込む、そこでまた新しいものが生まれるみたいなことをやれる空間が本当は欲しい。
- ・ ワケーションというワイルドな言葉を小泉進次郎大臣がつくられた。実際にはただのパケーション空間、ではなくて、生産性が高い疎空間を生み出せるとすごく素敵になる。

【藤野委員】

- ・ この成長戦略会議メンバーの前田さんが、ヘルジアン・ウッドという空間を作っているが、それが右上（風の谷）のところに近いと思う。前田さんは風の谷をどう見たかというところを聞きたい。

【前田委員】

- ・ 安宅さんのお話を聞いていて、ああ、そうだなという思いと、すごくチャレンジング

な言葉を言うと、「僕やっています」って思った。立山町の麓で世界一美しい村を20年間かけて作ろうということで、開疎化という言葉を使いながら、電信柱と携帯の電波塔がちょっと邪魔で困っているけれど、美しい村をつくろうと思ってやっている。

- ・ 世界的な建築家の隈研吾さんと4年前に出会うことができ、少しずつ散居村を模したリゾートではない村をつくろうということで、僕が今開拓している集落の1平方キロメートル当たりの人口が0.0003人。とんでもない限界集落のところに学校も復活させようと思って動いている。
- ・ 今年、田園風景を前にして隈研吾さんと2人で話していたときに彼が「大きな空間とか大きな建築はもうやりたくない。」とおっしゃっていた。できる限り小さな建築もしくはできる限り小さな空間、それを適度な規模観で点在させたい。小さくても豊かな経済体を点在させるような、そういった建築空間をやりたいということをおっしゃっていた。まさしく、安宅さんがおっしゃった空間価値を高めるというのは、そういった世界的な建築家の言葉にも表れているのかなと思う。
- ・ そういった空間的な価値、空間当たりの価値を高めるときに、富山県民に圧倒的に足りないと思う僕が思っていることが、お金の使い方。僕たちは製薬会社で、今度、前田薬品として産業観光をするが、この前、トリップアドバイザーの元社長の原田さんという方とお話をしていたら、絶対ただでやっては駄目だとおっしゃっていた。
- ・ 富山県民って何かと豊か過ぎて、ただでやってあげます、ただでこれあげちゃいますとやっているけれど、ただほど県の価値や産業の価値を下げることはないということで、やはり適正な価値をつけて、それをいい形で循環させるということをもっと幼少の頃から教育させるべきだと。藤野さんはお金や経済の教育をもっと幼少期に入れるべきだとおっしゃっているが、本当にそうだと思う。貯蓄率ナンバーワン、持家率ナンバーワンでありながらお金の使い方が下手な富山県民、これを徹底的に変えていかないといけない。
- ・ そういった中で、僕は今、このヘルジアン・ウッドという一つのアイキャッチを作れたと思うが、ここに次、国際的な学校を作って小さな村を点在させたいと思っている。僕は今、ビレッジ・イン・ビレッジ、ViV（ビブ）というプロジェクトを立ち上げようとしていて、村の中に小さな村をつくろうと思って、まさに美しい疎空間、世界一美しい村を標榜して立山の麓で事業をしている。

【高木委員】

- ・ ヘルジアン・ウッドでつくられているような景色を1個の資産にしていくみたいなことをちゃんと戦略的にやっていくというはある。

【前田委員】

- ・ 今年、藤野さんのご縁で、去年の秋に山形のスイデンテラスに行って、ヤマガタデザインの中中大介さんといろいろ話をさせていただいて、今年もスイデンサミットというのを富山で彼らと開催する。
- ・ 彼の言葉で象徴的だったのが、たくさんのいろんなものを作るよりは、前例に従わない圧倒的な日本や世界の一事例を作ることがその県や地域のブランドを作るということ。何でもかんでもやるんじゃなくて、圧倒的な一点突破できる何か前例のないすごいものをつくる、圧倒的な事例を今新たにつくるということがすごく大事なかなと感じている。

【高木委員】

- ・ 今の話で、山崎さんの意見もお聞きしたい。ポートランドとかのまちづくりをされている観点から見て、どういうふうにブランドとか資産を積み上げていくのがいいのか。まちのイメージのつくり方に近いかもしれないが。

【山崎氏】

- ・ いろんな国で活躍している感度のいいまだ30代、40代の方々なんかは、ラグジュアリーはもう欲しくない。大金持ちを対象にしたクルーズとか、そういったツアーは全く興味がない。さっきの事例でもそうだし、南砺の井波でもやろうとしていることがそうなんだけれど、Bed and Craftとか、そこでしかできない体験を緩く楽しくしたい。
- ・ そんなにがちりゴージャスじゃなくてもいいし、普段着で行けるんだっとなおさらありがたい、そういったノリが多いと思うので、やっぱり地元の人とのコミュニケーションとか、地元の環境の体験が重要になってくる。
- ・ あとは、わちゃわちゃしていないのが非常に重要で、大勢来ると困る。そういった人たちも、全く無名でもなかったりもするし、隈さんみたいに有名な人もいるので、わちゃわちゃしているところには行きづらい。

- ・ そうすると、ある程度プライバシーが確保できて、自然環境、地球環境に触れられて、そこでしかできない体験、つまりは土地の記憶みたいなことが体験できることが重要になってくると思うので、あとは規模感の問題で、今見せていただいた、これから20年かけてつくる村というの、時間をかければうまくある程度の規模になると思う。
- ・ 一軒家のために何時間も皆さん移動はしないと思うが、ある程度のスケールで、密でないというのと、あとは本当にもうそこでしかできないことがとがっているのであれば、お金をかけてでも時間をかけてでも行く価値が生まれる。なので、その地域性とか、そこに住んでいる人たちの生きざまとかはすごく重要になってくると思う。

【高木委員】

- ・ 富山は暮らしている人たちの生きざまとかライフスタイルとか、そういった部分のレイヤーの発信がほぼないと思う。ポートランドのインスタグラムとかを見ると、暮らしという感じが伝わってくるのだが、何が根本的に足りないのか。

【山崎氏】

- ・ たくさん要素があると思うが、1つは、僕は旅行業の立ち上げとかも手伝ったことがあるので分かるが、インスタとか発信に対する価値の基準が西洋的なので、自分たちはすぐわないと思っている部分がある。
- ・ 例えば僕のポートランドとかコペンハーゲンとかニューヨークの友達は、例えば氷見とか富山湾とかへ行って、おじいちゃんの漁師が魚を釣り上げて、偉そうにしないでそれが当たり前風に市場に持っていったりするのがすごく刺さる。でも、それは地元の人にとっては日常で、大したことはないから、わざわざインスタに収めてちょっと加工して上げるなんてことはしない。
- ・ その辺の価値観の差があるので、これは日本的にはすごいんだという新たな価値を戦略的につくっていかないといけない。プラットフォームがInstagramになった瞬間に、そこのおいしさ、その面白さの基準が決まってしまう。だから、これから風の谷を広めていく日本としては、その新しい価値基準でプラットフォームをつくらないといけなくなるかもしれない。もしそれが必要なら、その辺が1つのアングルかと思う。
- ・ もう一つは、表に出た要素ばかりが勝ちじゃないというのも考えながら活動できるお

客さんが増えないといけないという反対側の側面もある。

【高木委員】

- ・ その価値基準は中の人だけでは結構難しい。外の目線が一定程度あるからこそ、その価値が分かって編集して出せるというのがあると思う。

【山崎氏】

- ・ あと、価値をプロデュースする人がグローバルなネットワークを基に基準をつくらないと、自分たちだけの価値の発信でも駄目だし、相手側が欲しがっている価値だけを発信するのもよくない。やっぱり自分たちが求める将来像にそぐうもの、一番沿ったものをつくっていくしかないと思う。

【高木委員】

- ・ ポートランドも中からの価値の発信だけではなくて、一定の外からの目線だったり、そういうのによって編集されて価値がどんどん醸成していったという歴史があるのか。

【山崎氏】

- ・ 特に広告とかクリエイティブエージェンシーというのは、グローバルのネットワークがすごい。ポートランドは特にワイデンアンドケネディと言って、ナイキの広告をやっている会社が世界中に事務所を持っていて世界中からタレントを引っこ抜いてくるので、その彼らが磨いたものがまちの基準になる。その価値で発信するので自信を持っているという部分と、その価値の基準があるので、どうやったらとがらせられるかというものを持っている。その話がふだんからデザイン業界では出る。日本ではその話は全くない。

【高木委員】

- ・ その流動性が大分違う。特に日本の地方だとなかなか難しい。

【山崎氏】

- ・ あとは、最近では分からないけれど、過去、旅行業界にしてもデザイン業界にしても、

割と大きい広告屋さんが目立っているので、小さくて面白いことをしている人たちにも機会を与えないといけない。その業界の雰囲気とか派閥みたいのも日本は強いが、アメリカはそういうのはゆるゆるだから、目立つやつがぼんと出てくれる。その辺も違うと思う。

【齋藤委員】

- ・ 山崎さんにお聞きしたい。ポートランドの写真を見ると、非常に富山に似ている。富山には高い立山があって、田園地帯もある。似ているので非常に参考になるが、スライドの中で言われたエコノミーとエコロジーをいかに両立させるかというところで、まちぐるみで様々な住民の意見も含めた形で都市開発をしているところが非常に参考になった。ある意味、住民を挙げてみんなまちが好きで、まちをどうしていったらいいのかと議論することが、これから日本のいろんなまちが生き残るためには必要なのではないかと思う。
- ・ 私は大学の学長をしているので、教育に対して非常に興味がある。子供たちや住民に対してどのような教育を行っているのか、その中で大学の果たす役割は結構大きいと思うが、大学はどういった役割を果たしているのかをお聞かせいただきたい。

【山崎氏】

- ・ 教育は日本の割と一辺倒な教育と違い、各都市によっても州によっても方針が違っている。特に僕が驚いたのは、うちの娘が小学校2年生ぐらいのときに、普通の社会や工作の時間にまちについて勉強する機会が多くて、社会科見学みたいなことはたくさんやるし、あとは、図工で三角錐のような工作物を作ってきたけれど、2年生が、片面がネイチャー、片面が都市（アーバン）、もう片面、3つ目がサバーブというのを台にして、自分のイメージをそこに貼り絵をしたり、絵を描いたりして、その三面を作って家に持って帰ってくる。
- ・ その頃から、ポートランドの隣のビーバートンというところに住んでいると、自分が住んでいるのはサバーブで、きれいな小川が流れていて、ビーバーが住んでいて、畑があって、家があって、バス停があって、電車の駅があってみたいなことを描く。アーバンは町なかがあって、電車がたくさん通っていて、バスもたくさん通っていて、ビルがたくさん。田舎には本当に大きな山があったり海があったりということを描く。

- ・ その頃からそういったものを植えつけていて、自分の役割がどこかみたいなのもそこでディスカッションしたりする。そういったことを小さい頃からみんなが当たり前やってきて育っているんで、まちへの思いというのが自分が大人になってからの空間への思いというふうにつながりがある。自己実現しやすくするための一つの暗示みたいな感じにもなっている。
- ・ 大学の役割については、ポートランド州立大学はダウンタウンのど真ん中であって、門もなければ壁もない。ダウンタウンに行ったら、いつの間にか大学のキャンパスを歩いていて、それを通り抜けたら、またまちになる。ダウンタウンにあるキャンパスのスローガンとして、まちのために自分の知識を生かそう、Let Knowledge Serve The City というのがある。まちを住みやすくするため、まちがよくなるための大学という自分たちの立ち位置をうまく決めている。
- ・ ほかの大学は全然違うスローガンだが、共通して言えるのは、大学というのは既に実践の場で、例えば自分たちが都市計画を勉強したら、都市計画の研修生として、いろんな施策とかワークショップとかデザイン業に飛び込んでいって修行するようなことを大学3年生ぐらいから大学院までずっと続けるような方々がたくさんいる。全然違うエンジニアとかビジネスの分野でも、町なかで働きながら大学に行くということが当たり前になっている。その辺は大分、日本の門もあって壁もあってという感じの大学とは違うと思う。

【齋藤委員】

- ・ 地域に根差した大学として活躍する、そういった活動をすることで地域に残る人材も増えていくし、様々な形の社会見学をすることで経験も積んで、社会で役立つような人材を輩出しているということがよく分かった。

【土肥委員】

- ・ 山崎さんにご質問したい。今回の会議テーマが目指せポートランドということで、私もポートランドってどんなまちなんだろうというのを調べて、YouTubeとかでもポートランドの暮らしとかいっぱい動画があって、すてきだなと思った反面、これを目指すことが富山で実現できるのだろうかと思った。もちろん町並みとか自然の豊かさとかは近いものがあると思うが、暮らしている人たちの考え方の違いというか。

- ・ 例えば、先ほどのお話で、自分たちの地域をよくするためにディスカッションをしたり、自分が持っているノウハウを反映させていこうみたいな動きがあるということだが、富山では、そもそも地域活動に参加したいと思う人が、私自身も含め、少ないと思うし、参加して例えば何か発言する、ちょっと思い切ったことを言うと、やっぱり出る杭は打とうみたいな県民性がすごく強いと感じていて、そういった部分に対して、何か実践的にこうしたらいいというご意見があればお聞きしたい。
- ・ また、ポートランドは、こういう人たちに来てほしいというコンセプトがあってまちづくりをしているということだが、今、富山県は移住を促進していて、変な言い方をすれば、誰でもいいからみんな来てみたいにやっていると、昔から富山にいる人たちと、富山の自然に期待して来る人たちとのギャップが激しくなると思うが、どうしたら解決していけるのか。
- ・ もう一つ、まちの中に自然空間とか水場があるような遊び場が結構点在しているということで、これも富山も同様に結構あるかなと思う。ただ、富山の場合は、雨とか雪とか猛暑で、外で遊べる日が年々少なくなってきている中で、室内での遊びの空間を求める声が増えている。コロナ前は県外の遊び場とかも幾つか見に行ったが、子供は楽しそうだが、その横でスマホをいじっている大人ばかりが集まっているという印象があって、その辺、ポートランドの子供たちが遊んでいる空間での親の様子はどんな感じなのか教えていただけたらと思う。

【山崎氏】

- ・ 移住者の誘致というか招聘というのは、本当に短期的なものだと思う。日本中から富山に移住者が増えたら日本がよくなるかということ、それは怪しい。
- ・ 一番いいのは富山好きが増えて富山がどんどんよくなることだと思うので、やっぱり富山の価値というのを打ち出すことによって、富山のそういったところが好きだから富山に住みたい、またはその打ち出しがうまくいってれば、もちろん富山に住んでいる人たちが、もっと自分たちの住みたい生活とかスタイルを現実化できるようになるという哲学を僕は個人的に持っている。
- ・ なので、富山が魅力的になれば、人が減ろうが減るまいが、増えようが増えまいが、その中に住んでいる人たちの住み心地がよくなって生活の質が上がるというのを大前提に、それって何なのかとみんなが納得いくようなビジョンを打ち立てるのがリーダー

ーシップの務めだと思う。

- ・ 子育てとか遊びは、すごく複雑になりつつあると思う。僕が小さい頃は遊び場なんかなかったし、僕は茨城県の水戸の外れの田んぼしかないところで育ったが、サッカーボールとか、本当にちょっとしたもので遊んでいた。僕はそれを、すごく田舎で育ったから昔はちょっと嫌だなと思ったけれど、今考えると、アメリカの子供たちは、田舎に住んでいることがほとんどだし、あまり人工的なもので遊べないことも多いが、そのほうが自然主義というか自然の摂理がよく分かった人が育つと思うので、すごく都市的な人工的な室内でというのはあまりお勧めできない。
- ・ あと、日本の子育ての根幹にあるのが教育と受験になってしまっているのも、そこをどう変えていくか。受験しても、地球主義の自己現実に強い子供は育たない。どちらかという、今までどおりのエリート主義が育ってしまうと思うので、本気でいいまち、文化の濃いまちをつくるのであれば、日本の都会的なエリートを育てようと思わない、逆に振らないといけないと思う。ふだんから野原で遊んでいて、暑かろうが寒かろうが外で遊びたいとか、虫が好きだとか、動物が好きだとか、そういったことを本気で楽しめる子供が増えない限りは、その土地をよくしようとする大人に育たないんじゃないかと思う。
- ・ 週に5回塾に行っている子が将来サバイバーでクリエイティブな、安宅さんみたいな素敵なお大人になるんだとしたら、それはある程度勉強は大事だけれど、僕は本当は地球科学や宇宙科学の勉強でもしたほうがいいと思っていて、一流企業に入るための勉強ばかりというのはよくないと思う。そのためにも、やっぱり自然に触れたり人と対話をしたりということを増やすのが重要。
- ・ ポートランドは特に、大人は大人で盛り上がる。子供が遊んでいるときに大人が遊ぶ場所というのをちゃんとつくらなきゃいけない、それはスマホを見る場所じゃなくて会話を楽しむ場所だったり、特にポートランドはアウトドア派の家族が多いので、ある程度、山とか川、海のほうに行くと、スマホを使わない、または使えない、そういった場所もたくさんある。スマホで遊ぶのはちょっとしたときでいい。本気で遊びに行くときはもう命がけで自然の中で遊ぶのがオレゴンの人々の遊び方。

【中村委員】

- ・ 安宅さんと山崎さん、お二人のお話で共通していたのは、明確なビジョンを決めて、

そのビジョンに向かっていくというところだと思う。これは多分、県経営というか企業経営でも全く同じで、現状はこういうふうになっているからこれを変えようと言ってもなかなか前へ進まない。そうではなくて、私たちの存在価値はこういうことを世の中に起こすこと、という明確なビジョンがすごい大事で、そこは全く同じだと思う。

- ・ なので、富山も明確なビジョンを早く決めるということと、あとはビジョンと一緒にターゲット。誰でも満遍なく来てほしいとか、あとは移住者も、若年層に来てほしいのか、セカンドライフを楽しむ人に来てほしいのか、リモートで働きたい人なのか、地産地消の生活をしたい人とかいろんなパターンがあると思う。先ほど山崎さんがおっしゃったように、富山のことが好きな人というのがキーワードになると思うが、じゃ、富山の何が好きなのか、何を好きになってもらっているのかということをもう少し明確にしていく必要があると思う。
- ・ あと、広報のところ、富山県は広報下手だと以前から私も思っていた。提言として2つあり、例えば才能と情熱が都市に流出してしまうのは本当にそのとおりだと思うが、1つは、県内からの流出防止と県外からの外部の流入をさせるための施策として、富山に行ったら何か面白い人に会えるとか、勉強になるとか、いろんなコンテンツがあるということで集客するのがあるのだと思う。その一つが、私も先日訪問させていただいた前田社長がやられているヘルジアン・ウッドだけれど、非常によかった。そういうものをどんどん発信していきながら、そういうスペースだけでもいいが、そこでセミナーとかも開催して、いろんな学びがあるということを発信していくのも方法だと思う。
- ・ 2つ目は、これは安宅さんの話からのアイデアベースだが、みんなスマホを持っているので、スマホをベースにずっと情報発信ができるような仕組みづくりをやってもいいのかなと思う。例えば富山から流出してしまったよい人材というのは日本中にたくさん散らばっていると思うが、その方々の名刺の裏に必ず富山アプリのQRコードを入れてくださいとお願いして、それを1回読めば、ずっといろんな情報が送られてくるとか、富山の新しい情報、冒頭に知事がおっしゃった、富山湾岸サイクリングコースがナショナルサイクルルートに選ばれましたというような、全然知らない情報がたくさんあるので、そういうものをどんどん発信していくような仕組みというのもやってみてもよいのではないかと思う。
- ・ 最後に、安宅さんに質問があって、公共の予算で土木予算がとても多くて、それ以外

の予算に使われていないという話、私も富山に帰ったときに、何で不要な道がいっぱいできているんだろうとすごく感じる。そういう予算を有意義な教育、受験のための教育ではなくて、例えば専門分野の教育とか、伝統工芸の教育とか、あとは子育て支援をもっとしてほしいと私も思っていて、保育園の収容数とか、保育士のクオリティを上げるとかいろんなことができると思うのだが、どうしても今までの流れで、土木にお金をくれという有力者とかも多くて、土木にお金が行きがちだが、その辺をどうやったらコントロールして、土木ではなくて教育や医療に向けられるのかというのがあれば教えていただきたい。

【安宅委員】

- ・ まず、同じ土木をやるにしても、美的にも、将来的なメンテナンス費用の視点から見ても、固い土木は本当に必要な部分以外はできる限り控えたほうがよくて、不必要な部分はほぐさないといけないと考えている。実はほぐすだけでしばらく土木費は相当必要。軟らかい土木。水がちゃんと流れる土木。都市部以外の疎空間に引く道は余程の幹道以外はいくら引いてもペイしない。計算すると分かるが、大体の道は少なく見積もってもキロ10億はかかっている。場合によっては70億とか、よく分からないぐらい金がかかる。メンテナンス費用は半端ない。だから、もっと低廉に回せる道に直すことが大切になる。
- ・ ほぐしてやわらかい道に直すのに多分土木費は当面同じ額が必要だが、それが終わったら、土木系の方々にはすてきな求心力になる空間づくりに関わっていただく。まちとか商業空間とか生活&オフィスの空間とか、価値創造側に加わってもらいたい。
- ・ 国交省のi-Constructionの企画委員の一人として学んだのは、土木関係はすごい人数の方々働かれています。つい数年前まで340万人もいて、ただ10年以内に220万人まで減るという予測。県とか市への陳情の99%が道だと僕もよく聞く。ただ、それは彼らが食べるだけのお仕事が必要というだけの話で、ほぐしたり、空間価値増大側にも土木的なお仕事はいっぱいあるのでそこは理解して頂けるのではないかと思います。
- ・ だから、現在の土木費は、ほぐすことも含めて、空間価値を生み出す側とにかく回すべしというのが僕の見解で、空間の求心力を上げる方をやってもらおう。そのスキルがないなら身につけてもらおう。大丈夫、つくるとは同じで、違うつくりをしないとイケない。とにかくリターンが生み出される、つまりは空間の価値につながるように

する。一にも二にも空間の価値を上げることに繋げることが大切。

- ・ なので、土木費は当面かかる。谷化しようとしても、電信柱を全部下ろすだけでも金がかかる。しばらくはやることがいっぱいあるので金はかかる。ただ、その後は違うことに突っ込む。空間価値を上げる側に突っ込むことが基本だと思う。

【中村委員】

- ・ それを継続的にコントロールしてしっかり判断していく人がすごく大事だと。

【安宅委員】

- ・ はい。あと、日本には全般的にコモنزの思想がないので、それを入れないとやりきことは難しいと思う。空間価値を壊すような土木は駄目だという基礎的な思想、価値を具体的な改善をすすめる中で、社会全体にしっかり埋め込む必要があると思う。どんな田舎でも家と家の間にコンクリートで小さい低い壁があるけれど、ああいうものは美しさを破壊するので、石で埋め込む程度に変えたほうがいい。その辺は変えないといけない。
- ・ 教育云々の議論は言いたいことが山のようにあるので割愛するが、僕みたいに、中学時代、授業中に廊下で先生と生徒が殴り合って、授業中、暴走族が入ってきて窓ガラスが割られるようないわゆる校内暴力時代に育っても、別に教師に恨みはない。中学時代、僕は問題児として実によく立たされたり、よく職員室の前に正座させられていたが、校長先生から声をかけられたりして、あれはあれで楽しかった。このようにクラスルームでの教育は必要ない人には必要ないので、あまり下手にがたがた考えないほうがいいと思う。それより小学校ぐらいのとき本を読む習慣を身につけさせるほうがいいのではないか。

【藻谷委員】

- ・ 今日、皆さんが言っているところの公約数として、重要なことをもう一度ぜひ強調したいのは、「みんなを相手にする」というやり方じゃなくて、「これしか相手にしない」というのでもなくて、「富山は戦略として、まずはこういう特性のある方々を優先的に相手にします」ということをきちんと示したほうがいいということ。
- ・ とんがった人でクリエイティブな人を呼んできますと仮に目指すのであれば、そのこ

とをはっきりと打ち出したほうが良い。それは、その人しか来なくていいと言っているわけではなく、先にまずはそちらに声をかけようという話。我々は今の段階ではまず積極的にそういう人を呼びますということをちゃんと打ち出さないと通じない。

- ・ 観光も全く同じで、誰を呼ぶのかということについて、あえて我が県は、富山県を気に入って住むかもしれないぐらい気に入っている人にターゲットを絞るとか、富山の場合、銅器や木工などのクラフトに特長があるので世界のクラフトが好きな人にターゲットを取りあえず絞って始めるとか、そういう優先順位を県として打ち出したほうがいい。
- ・ 実際に人数が多く来るのは中国の人が多いかもかもしれないが、まずは人数にこだわらず、クラフト好きの多いドイツ人にもっと集中的に来てもらうようにそっちにターゲットを絞る、というようなことが重要だ。他のターゲットも後々は狙うし、個々人が別の線を追求するのはもちろん自由。だけど、県の戦略として、まず絞ってやるのはここだと示す方が良い。
- ・ アジア人の場合は、富山の住環境、富山の開疎な空間に引かれる人を狙うべきではないか。さっき安宅さんがおっしゃったとおり、富山でも可住地人口密度が500人/km²を超えているので、ヨーロッパだと一番密度の高いオランダ並みだ。イギリスなんかロンドンを入れても150人/km²。ロンドンを入れても富山の3分の1以下しか可住地人口密度がない。つまりそんな富山は、どうやってもヨーロッパレベルの開疎にはならない。アメリカは60人/km²なのでなおのことだ。だがアジアのとても密な都市空間、特に中国、台湾、香港、シンガポールといった密な場所に住んでいる人たちから見れば、「ああ、富山は開けているね」と感じるだろう。そうしたアジア先進地域の都市部に住んでいるクリエイティブな人を呼んでくるということにぜひターゲットを絞って、移住も観光も打ち出したらいい。物見遊山にアルペンルートを通って金沢に泊まる、というような団体客を増やして「〇人観光客が増えました」というようなことは、ぜひやらない方がいい。
- ・ 僕は都心のオフィスにはもう2年ほども行っていない。都心にいても頭は刺激されない。本当の意味でクリエイティブなビジネスをするのに、都心のオフィスなど要らないのではないか。僕の場合は、表参道に行くよりは、何もない富山の田舎でカエルの歌を聞きながら歩いているときのほうが脳が刺激される。繁華街で刺激されるということ自体が20世紀っぽ過ぎるのではないか。田園だとか、海辺だとか、棚田だとか、

さりげない田舎のカフェで刺激されるというのが21世紀の現実なのではないか。そういうことができる富山になれるのではないかと考えている。

- ・ 私のZoomの背景は伊勢志摩の南伊勢町の海。タヒチに行かなくてもこんなところがある。海沿いの電線が全くない空間にぼーっとボートを浮かべて釣りをしている人がいるが、そういうところにいるほうが本当にクリエイティブなものが刺激されるのではないか。
- ・ ちなみに、南伊勢町は今のままいくとあと30年で人がいなくなるペースで人口が減っている。だがこういう場所が評価できない住民は、全員いなくなってもいいのではないか。このすばらしさを見て分かって移り住む人は必ずいると私は思っている。

【藤井委員】

- ・ 95%ぐらい今のお話に同意だけれど、1つだけそういう議論に関して気をつけたいのがジェントリフィケーションの問題。田園空間のジェントリフィケーション、もしくは都市の猥雑空間のジェントリフィケーションになると、これはカルチャーを殺すと思う。
- ・ ポートランドなどパシフィックノースウェスト文化も、もともとはカリフォルニアのヒッピーが、東のヨセミテに行くか、北のオレゴン、ワシントンに行くかという形で自然を求めて行って、彼らが住み着けるだけの隙間空間、ジェントリフィケーションを避けるだけの安くてグランジな隙間空間があったから、ああいうウィアードなカルチャーが生き残れたのであって、意識高いクリエイティブ層だけが来るというのはちょっと危険だと思う。

【藻谷委員】

- ・ おっしゃっていることはよく分かる。しかし繰り返すが「これしか相手にしない」というのではなく、「戦略として、まずはこういう特性のある方々を優先的に相手にします」という話。そんなことを言っても、ターゲットではない人も自由に来る。実際はジェントリフィケーションは、日本では不可能。たとえば日本では、高級住宅地と称するものも、安いアパートも混在するような極めて庶民的な、演歌的な空間にしかない。どうせ仕上がりはそうなるわけで、だから、私はジェントリフィケーションはあまり心配していない。

【藤井委員】

- ・ 私が言うジェントリフィケーションというのは、いわゆる東京で言う世田谷、杉並のような小ぎれいな住宅地であって、都市意識がやたら高くて、近隣迷惑のクレームみたいなことをお互いやって、だんだん遊ぶ空間も猥雑空間もなくなってみたい、そういうジェントリフィケーション。

【藻谷委員】

- ・ なるほど、住んでいる人は極めて凡庸でクリエイティブでもない、単に自分勝手という最悪のジェントリフィケーションのことをお話になっていると理解した。私自身、そういう地区に住んでいるので、そこは本当にそのとおりだと思う。

【安宅委員】

- ・ 「富山への愛」云々を県外に出ていった人に語らせてはどうかという話について、外に出て行った人は、適切な居場所が見つからず、基本的にもう富山に戻りたくないから出ていった人が多い。僕もその一人だったけれど、今も疎外されている気がして住んでいない。自分みたいな生き物が全く受け付けられない空間なので出ていったというのが、ほとんどの面白い人の実態だと思うので、僕は高木さんがこの会議に入られたのは非常に感動した、藤井さんも同様。
- ・ 今回の成長戦略会議も、僕は新田知事を直接存じ上げていなければお受けしなかった。僕は前知事の時に知事を囲む会を東京で4回くらいご辞退した。これは前知事が苦手だったとかそういうことではなく、そのくらい富山県とは距離を置いてきたということだ。県人会からも距離を置いて、高校の同窓会の神通会からも距離を置いて生きてきた。なので、我々みたいな生き物に富山愛を語れというのは、結構厳しい。これは理解しておいていただきたい。
- ・ 面白い人、こういう人に来てほしいというのはよいけれど、僕とは若干認識がずれていて、例えば、非常に求心力がある地方都市の一つに尾道がある。そこは、映画とかに使われているだけではなくて、志賀直哉先生がそこで『清兵衛と瓢箪』を書いて、『暗夜行路』にもつながり、いろんな理由があって、非常に歴史的な空間がそのまま残っているところがあって、求心力がある。

- ・でも今そこに行ってみると、画面共有するが、こういうところ、例えばこういうような一角の中に入ってみると、こういう路地、肩1 m半あるかどうかくらいの路地を通って行ったらいきなり古本屋みたいのが出てきて、実際古本屋なんです、それで、そういうところにアグネス・ラムのポスターとかあったりする。こういうところに面白い人が住み着いてえらく興味深いことをやっている。こういう空間の隙間みたいなところに若い面白い人たちが来て面白いことやるんで、価値が続く。この写真は喫茶店だけれど、こういう路地の中にある。こういう人たち、これ若い女性が、例えば「かんばん娘」とかエプロンに縫いつけてやっていたり。
- ・つまり、選民的に人を呼ぶという発想自体が間違っていて、こういう面白いことをやりたい人が来なくなる空間を生み出せるかにかかっていると。まったく違うと。おしゃれなビルを建てるとかではないのだと。
- ・古くてもいいので、面白い人達が好きにいじって自分の空間だと信じていることができるハッカブルな空間を生み出せるかどうかにかかっている。それをやらないとこういう人たちが来てくれなくて、面白い土地にならない。ちょっとここは、僕は、間違っただけを感じかねないので、こういうなんかいろんな異質な生き物が流れ込んでくるサンゴ礁的な空間をちゃんと作ってあげて、選民的な話ではなくて、こういう人たちが積極的に来て、面白そうな空間を作れるかっていうのがポイントだと思います。
- ・僕は3歳まで高岡の大仏の真横で育っているけれど、あの脇あたりのシャッターが閉まっている店がかなり増えた商店街と違って結構、最高によく、ああいうところは、様々な実験をしてもいい空間だと。そういうハッカブル空間にして、面白く、なんかわけわかんないことやりたい若者に住んでなんかやらせてあげたほうが僕はよい未来だと思う。都市部について言うと。

【藻谷委員】

- ・私の言っているクリエイティブな人たちというのは、まさにそういう雑駁な空間を愛する人たちで、これまでの富山的な、洗剤で洗ったような雑踏のない空間とは目指すのは正反対。そこは誤解しないでいただきたい。

【高木委員】

- ・前回も、寛容性がすごく重要だという話があったが、すぐヒエラルキーの構造で物事

を考えたりにしがちなので、それを脱していくという、訴えが求められると思う。

【安宅委員】

- ・ そういう変で面白い若者とかが住むようになると、周りの住民も変わると思う。
- ・ だから、今の住民のメンタリティを変えるみたいな難しいことは考えないほうがよくて、異質がどんどん入っていくことによって、何か違う、もう一個の文化が生まれるみたいなことを多分考えないと、カイロプラクティックじゃない方法で。無理やりバキバキやってやるのはうまくいかないのではないかと。
- ・ だから、何箇所かそういう面白い街が出てくると、魚津のあたりのもうほとんどうまく動かなくなった商店街のあたりとかを、ハッカブル空間にしてしまう。滑川とかもいい感じで元気がなくなっているのが最高だと。半分死にかかった都市空間がハッカブル空間を作るという意味では最高にポテンシャル的にはよくて、そこに変な人が住み始めるのがいい。
- ・ 富山市街なんかは正直難しいと思っている。それはがちがちに作りこみすぎていて、面白い人が住み着く空間があまりない。僕が高校時代によく食べた真っ黒で病みつきになるラーメン屋が大和の脇あたりにあるけれど、あそこの周辺とか当時、無茶苦茶よかった。2年ほど前に行ったらすごい開発された感じの街になっていて、全然（いじる余地がなく）ダメだなと。あの当時はハッカブルだった、今はハッカブルではないと。
- ・ だから、ハッカブル空間をいっぱい作ってることが重要で、面白い人を、家賃タダでいい、月千円でいい、ペンキも何塗ってもいい、なんかそういうのがあるといいのではないかと。